

2019 6/11

No.2092

毎月第2・第4火曜日発行

# 政経 かながわ

一般社団法人  
— 神奈川政経懇話会 —



相模川、酒匂川、早川、多摩川などで1日、アユ釣りが解禁され、この日を待ちわびた太公望らが各河川に訪れた。漁期は10月14日まで。



## contents

視点・点描	3
日中友好の懸け橋に	
政治	4
誌上座談会「19年夏の官庁人事を占う」 官邸とのパイプ重視 女性活躍、一段と加速	
地域経済	8
空き家対策は「まちづくり」 ～尾道の取り組みから学ぶ	
暮らし2019	10
女性活躍、シルバー人材でも	
企業最前線	12
急速に盛り上がるeスポーツ熱 大会開催で関連産業が活性化	
アジアの風	14
森の魔力	
NNAアジア経済レポート	15

### 事務局だより

◇2019年6月特別講演会  
6月14日(金)午後1時30分～3時

崎陽軒本店5階「マンダリン」  
講師は気象予報士・防災士の  
平井信行さん

演題は「自然災害に備えよう  
～台風、豪雨、猛暑～」

◇2019年7月定例講演会  
7月29日(月)午後1時30分～3時

ホテルモントレ横浜3階「ビクトリア」

講師は明治大学特任教授の金子隆一さん

演題は「人口減少社会の実相  
～日本の課題と挑戦」

【お知らせ】 神奈川政経懇話会ではホームページ ([www.kanagawa-seikon.jp](http://www.kanagawa-seikon.jp)) に会員コーナーを設けました。新商品の紹介、地域貢献活動、人事などジャンルを問わずさまざまな情報を掲載します。問い合わせは事務局 ☎045(226)2121。

# 視点 点描



## 日中友好の懸け橋に

緑やピンクの鮮やか水餃子、ふつくらした肉まん…。食卓に並んだ品々は家庭的ながら、人気店のメニューのようにおいしかった。

取材で親しくなった中国帰国者の猿田勝久さん(75)から「一緒にご飯でも」と誘われ、横浜市内のご自宅で手料理をごちそうになった。その腕前の理由を聞くと、「小さい時から養父の下で食事と

洗濯は仕事。たいていの料理は作れるよ」との答えが返ってきた。

猿田さんは1945年の終戦の2カ月前、川崎市から家族とともに中国に渡り、戦争末期の混乱で取り残された。1歳の時だった。中国東北部の黒龍江省チチハル市は冬には氷点下40度以下となる極寒の地。父親が中国人の家の手伝いをして、一家は糊口をしのい

だが、父親、祖母、生まれたばかりの妹が次々に病に倒れ、亡くなった。その後、優しい中国人男性と再婚できた母親も、猿田さんが8歳の時に結核で命を落とした。

「あなたは日本人です。大きくなったら親戚を探しなさい」。日本語を忘れても母親の遺言を忘れたことはなかったが、肉親捜しは72年の日中国交正常化を待たなければならなかった。少年期、家事をこなし、学友に「日本鬼子」と侮蔑されながら懸命に生きた。

永住帰国が実現するのは85年。母親の名が手掛かりとなって親戚が名乗りを上げた。家族を連れ帰国したが、言葉が通じぬ祖国での生活は過酷だった。職場で仲間とコミュニケーションがなくて、いじめられた。「日本語を覚えなければ」と焦り、睡眠を削って無理を重ねた日々が心身をむしばんだ。猿田さんが日本語を話せるよう

になったのは定年退職してからだ。日本語ボランティアが開く教室などを週に6〜7カ所を掛け持ちし、家でも猛勉強を重ねた。日本語漬けの毎日は今も続く。

「せっかく勉強できる時間も環境もあるのにもつたいないでしょう」と明るく話す猿田さん。「中国にいた時は勉強したくても金も時間もなくて、帰国後は家族を食べさせるために、まず働かなければいけなかったから」と振り返る。

目下の夢は2020年東京五輪でのボランティア活動。横浜市の都市ボランティアにも応募した。懸命に生きた二つの国の言葉を使い、「中国から来る人の通訳となり、日中友好の懸け橋になりたい」と意気込む。苦しい時に助けてくれた両国の優しい人たちへの恩返しの意味もあるという。

(神奈川新聞社編成部長

高本 雅通)